

Effects of Weight Loss on Sweet Taste Preference and Palatability following Cognitive Behavioral Therapy for Women with Obesity

西原, 智恵

<https://doi.org/10.15017/4059943>

出版情報 : 九州大学, 2019, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License (CC BY-NC-ND)

(別紙様式2)

氏名	西原 智恵			
論文名	Effects of Weight Loss on Sweet Taste Preference and Palatability following Cognitive Behavioral Therapy for Women with Obesity			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小川 佳宏
	副査	九州大学	教授	森 正樹
	副査	九州大学	教授	馬場園 明

論文審査の結果の要旨

肥満者は甘味嗜好が強く、甘味摂取が増加して過体重につながると考えられている。近年、外科的減量による甘味覚の変化が指摘されているが、本研究では、認知行動療法による非外科的減量前後の肥満者の甘味覚変化を評価した。

女性肥満症患者に対して認知行動療法を用いた7か月間の非外科的減量を施行し、肥満群(23名)と健常群(22名)の甘味覚(閾値濃度、閾値以上の濃度における味感受強度、嗜好濃度、味刺激反復に伴う快情動や他の味に対する欲求)を検討した。肥満群は、減量介入により平均14.6%の体重減少を認めた。閾値濃度と味感受強度では、介入前後ともに両群間に有意差は認められなかった。甘味嗜好濃度は、介入前には肥満群は健常群と比較して有意に上昇していたが、介入後には差が消失した。介入前の肥満群では、甘味反復刺激に伴う快情動値の変動の下降が有意に少なかった。一方、肥満群では健常群に比較して、同反復刺激に伴う他の味に対する欲求値の上昇は有意に少なかったが、介入後には両群間で有意差はなかった。以上より、女性肥満者において増強している甘味覚の快楽要素が非外科的減量により正常化することが示唆された。又、減量前の血清レプチン値と甘味嗜好濃度には交絡因子調整後に有意な正の相関を認められ、レプチンが肥満者における甘味嗜好の増強に関与する可能性が示唆された。

本論文により、認知行動療法による肥満の改善に伴って甘味覚の快楽要素が正常化することが明らかになり、非外科的減量による甘味嗜好変化は、行動介入の動機付けや継続性、リバウンド防止において有益な情報になると考えられる。

本論文についての試験では、本研究の目的・方法・実験結果と解釈・意義の概要について説明を求め、各調査委員より本論文の内容に関連する事項について、専門的立場から質問を行い、概ね満足すべき回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。